# 光と影

k.moc

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と影

【Ｎコード】
Ｎ８４０９Ｑ

【作者名】
ｋ．ｍｏｃ

【あらすじ】
田舎町に突如現れた不審な遺体。
それはある大きな陰謀の始まりに過ぎなかった。
そしてその陰謀を巡って特異な力を持った者たちの戦いが始まる。

## Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～序幕～（前書き）

処女作となるオリジナルであります。
とりあえず読んでもらえればうれしく思います＞＜
できたら感想もお願いします。

# Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～序幕～

（なんだよ！？なんで・・ちくしょう！！なんでなんだよぉ！！！？）

考えろ！！いや考えたって何も分かりはしない。ただただ後ろに迫る恐怖に怯えるだけだ。恐れが深まるだけだ！！

だから今はひたすら走る。疾走する。出来るだけ速く。疾く。駆ける。駆けていく。

そんな状況下でも唯一分かることは“奴”が異常だってことだ。“奴”が、その存在そのものが異常なんだ。もう駄目だ。駄目だ。どうしてこうなったというのか。俺は何から間違えて俺の人生は何処から狂ってしまったのだろう。

絶望感がどんどん体に沁み渡ってくる・・・

（そう、そうだ！！“あの事件”あれに首をつっこんだから・・・あんなつまんないことに・・・・・。）

反省したってしきれない、ちょっとした好奇心が己を襲うことになろうとは・・・・・・・。

「はぁ・・っはぁ、っはあ。」

ちくしょう涙が出てきやがった。もう足も限界だ。時期に動きは止まってしまうだろう。そうなったら俺は確実に殺られる。息の根を止められる。

しかしそこで奴の気配が突然消えた。依然足は動かしながら振り返ってみる。誰もいない。

（逃げ切った！）

いやそれは楽観すぎた。そうそんなはずはないのだ。“あれ”からは決して逃げられやしない。逃げられるはずがない。

視界がいきなり一段階低くなった。ガクッと、突如として崩れるように前向きに体が傾く。

（しまった！！躓いたか！？）

慌てて体制を建て直、せなかった。出来るはずが無かったのだ。足が無かった。両足がスッパリと、膝のあたりから切断されていた。

「・・・・うぉおああああjdふぃjふぉあ！！！！！」

獣のように唸りながら倒れこむ。

そして次の瞬間には“奴”は悠々と目前に現れ俺を見下ろしていた。俺は地に伏していてなんだかとても冷たくて・・・・・・。

ハハッ。ほらやっぱりだ。やられてしまった。

なんだよさっきまで死ぬほど怖かったのに。泣いちまうほどに。でもなんだか今は何もかもが爆笑コントのように可笑しかった。愉快だった。

けど何故だろうこんなに面白おかしいのに、なんだかとても眠たくて体を包み込むように広がり続ける赤い液体は適度に暖かくて・・。意識が遠のく。とてつもなく眠い。

「さあてお姫様。そろそろこれくらいは『元通り』に出来ますか？」

薄れゆく視界の先で“奴”は俺を指差しながら何者かに語りかけていた。

「どうして・・こんな・・・・。私のにはまだこれに干渉するだけの力は無い。」

何者かは酷く動揺しているようだ。声色から伺える。

「すべては宿願のため。それに貴女のが後少し力を蓄えればこれを元通りにすることはいずれは造作もないこととなります。しかし・・そうですかまだまだ足りないようですね。」

“奴”が喋り終えたと同時にドスっと音がして・・そうして全ては終わった。

## A daily accident～日常の異変～

―三日前―

俺、江波薫が着くと既にクラスは何やらざわついていた。

「おう薫。見たか？聞いたか？」

早速興奮気味にこう切り出してきたわが悪友、中村和也に答えを返す。

「カズ、お前が言ってんのって例の死体のこと、だよな？まぁ詳しいことはよく知らないけど。」

クラスの皆がざわつくのも無理はない。時は情報化の一途を辿る平成の真っただ中。日々リアルタイムに聞きたくも無い芸能スキャンダルやら耳を塞ぎたくなる政治家の不祥事、海外の凶悪犯罪のニュースが入ってくる世の中ではあったしそんなものは特に珍しくもない。“他人事”だからだ。

しかし俺たちの住むこんな片田舎で死因不明の遺体が見つかるなんてことはそうあることではない。

「ちゃんとニュース見てねえのか？まあ確かにそこまで詳しくは言ってなかったけど。親父の話を聞くとどうも変死体らしい。なんでも全身擦り傷やら切り傷だらけだったらしいんだけどな。」

ちなみにカズの父は駅前の交番に勤めるまあいわゆるお巡りさんである。どうやら事件現場の検証の際に動員されたらしい。

カズの答えに俺は顔をしかめた。確かに体中に傷があるってのは変だけどそれが変死体？内臓の疾患とか持病とかが原因ってだけなんじゃ・・・。

そんな俺の内心を見てとったようでカズは続けた。

「問題はその続き。傷以外に目立った外傷は無かった。ところがさ、死体解剖してみたらなかったんだよ。あるはずのものがさ。」

「何が無かったんだよ？」

「肋骨。一本だけな。手術かなにかのせいかもしれないそうだけど

切開した痕は無いらしいからどうにも奇妙なんだよ。まぁ警察は今のところ外傷の原因を突き止めようとしてるらしいけど殺人の線は薄いと見てるらしい。俺が思うにだな・・・・・」

しかしカズが言い終える前に担任が教室に入ってきたのでとりあえず話はここで途切れた。

「行ってみねぇ？」

こうカズが切り出して来たのは放課後すぐのことだ。

「何処にだよ？」

そう言ってカズを見ると、こいつニヤニヤしていた。

「現場だよ。現場！見たいだろ？」

「現場ってあの変死体のあった場所かよ？んなとこ行ったって警察が徹底的に調べた後だしどうせなんも残ってねぇだろ？だいたいそんな現場に入れるのか？」

すかさずカズは答えてきた。

「何か面白いものあるかもしれねえだろ？無かったら無かったでゲーセンなりカラオケなり行きゃいいじゃん。もし無駄足だったら驕るからさ。まあ入れるかどうかは全く分からんが。どうにかなるだろ。」

で結局俺たちは例の現場に来ていた。これが何処か遠くの土地なら絶対に勝手は違っただろう。しかし地元で起きた事件ということもあって俺自身少しは興味があったし放課後は暇だった。ならちょっとくらい友達に付き合うのも悪くは無かろう。そんな風に考えたのだった。

幸いかどうかはわからないが警察は既に撤収した後のようで、テープやら立ち入り禁止の柵なんかは色々立てられていたりしたが中にはもう誰もいないようだった。

「んじゃま行きますか。」

「ん。まぁなんもないと思うけどな。」

柵を乗り越えようとしたその時だった。

「待ちたまえ。何をしてる。」
俺たちが驚いて後ろを見るとそこには一人の男が立っていた。長身でがっしりしていて身なりは地味だ。だがその顔立ちは身なりとは裏腹に横を通り過ぎれば思わず顔を向けてしまう、男の俺が言うのもなんだかかなり整った顔立ちの男で、年はまだ若い。おそらく二十代後半から三十代前半といったところか。
「え～っ、あのぉ、ちょっと興味があって近くで見たいなって・・・。お兄さんは警察の方ですか。」
若干テンパりながらもカズが答えた。
「ああその通りだ。そんなことより立ち入り禁止の文言が見えないのかな。興味本意でこういう事件に首を突っ込んじゃいけないよ。さ、帰りなさい。」
男はそういって手で促した。俺は黙って従おうとしたがカズはなにか引っかかったらしい。食い下がった。
「失礼ですけどこの事件の担当の方ですか。県警の方ですか。できたら警察手帳見せて貰えます。そしたら自分も引き下がります。」
「い、いや。そんなものを見せる必要はないだろう。ここは立ち入り禁止なんだ。分かったら早く帰りなさい。」
なんだ、様子がおかしいぞ。カズも攻勢を強めて続けた。
「この事件はほとんど事故だと判断されてるはずですが、私服でここに張っていたって言うなら私服警官つまりは刑事さんということになる。おかしいですよねこんな事件で刑事さんが一人で張り込みなんて。だから見せてくださいよ、手帳。」
そうだよ。確かに変だ。片田舎の殺人の線もかなり薄い事件ともいえない事件に刑事が現場で張り込んでるなんて。しかも一人で。男は一瞬躊躇う素振りを見せたが意を決したらしい。こう言った。
「分かった。身分を明かそう。本来明かすべきでは無いのだがしかしそうもいかないからね。僕は警察ではない。内閣府外局機関ＮＰＳＣ、すなわち国家公安委員会の斉藤隆一だ。これがその証明書だ。」

俺はドラマで見た警察手帳以外の証明書なんてせいぜい運転免許証くらいしか知らないがおそらくこれは偽物なんかではないだろう。証明印やら書式をみてそれだけはなんとなく分かった。しかしこいつは凄いことになったもんだ。まさか国家公安委員会とは。政経の時間に習った。確か警察を統括する機関だったはずだ。後は何をするのかは良く分からんが、しかしそんなところから人間が来るってことはこの事件なにかあるのではないか。せいぜい暇つぶし程度に考えてたが、これはとんでもないことになるかもしれない。このとき俺はそんな期待がふつふつと沸いてきていたのだった。

## Ｎｏｎｄａｉｌｙ～非日常～（前書き）

第二部書き終えましたので。（不完全な状態で投稿してましたが）
この三部はまだ未完です。完成し次第前書きは削除します。

## Ｎｏｎｄａｉｌｙ～非日常～

その後は矢のように時間が過ぎていった。俺らは近くの喫茶店に場所を移して話を進めた。斉藤さんは話してみるととても親切な人物で一般人には話せる限界があるとは言いながらも色々と教えてくれた。

それは今回起こったこの変死事件はとある組織絡みの殺人である可能性がある。しかもそれはどうやら全国的、あるいは国際的な規模の組織であるようで公安が直属で指揮を執り極秘裏に足取りを追っているといった内容であった。。

「しかし今回の事件が何故その事件に関係あるって思ったんです。それにそんなことをわざわざ僕たちに教えて良かったんすか。もちろんありがたいんですけど。身元を明かした時点で最初のように僕らを追い返せばそれでよかったんじゃ。」

こう言って斉藤さんのおごりと言う蠱惑的かつ気が引ける提案を甘んじて受けここ喫茶「渚」の人気商品であるミートナポリタンソーセージスパゲティを頬張るのは我が友カズこと中村和也である。

「むしろお前はここが斉藤さんもちだってことをもう少し考えろ。けど本当に良かったんですか。」

カズを嗜めつつ俺も疑問を口にした。

「今回の事件との関連性は残念ながら教えられない。機密事項だからね。しかしまああえて言えることがあるとすれば、殺人の手口に残された“痕跡”、だね。それから今まで君たちに話したことについては全く問題ないさ。さっきも言ったけどここで言ったことはどれも特に秘匿扱いってわけじゃないし、あの時は追い返そうとしたけど僕はここのことはよく知らないからね。地元の君たちのような人の協力も必要だろうと思い直したわけさ。どうだろう協力してくれるかい。」

斉藤さんは僕らをまっすぐ見てこう言ってきてくれた。当然断る

理由はない。むしろこちらから協力を願い出たいほどだ。
「こちらこそ是非協力させて下さい。なあカズ。」
カズもうんうんと少し興奮気味に頷いた。
「ありがとう。これで捜査も迅速に進められそうだよ。早速明日からお願いするからね。今日のところは話も纏まったし、僕も本部に報告しなきゃならないことがあるからね、解散としよう。」
もっと色々と聞きたいこともあったが俺らは明日から斉藤さんとともに行動するんだ。聞く機会なんていくらでもあるだろう。そう考えて俺らもその後は大人しく家に帰ることにしたのだった。

長いな、長すぎだろ。
俺はとりわけ真面目でも不真面目なわけでもない。今までだってそりゃあ授業が長く感じることはあったが今日程のことはないと断言できた。一分が十分にも二十分にも感じられて、それこそ時間が止まったかのようだった。理由は簡単、今日はいよいよ斉藤さんと例の事件の調査を始めるのだ。期待は膨らむばかりである。一刻も早くカズとともに突っ走っていって斉藤さんのところに行きたかったが俺たちは学生だ。そんなことは出来ないしもししたところで斉藤さんは決して僕らと捜査をしてはくれないだろう。とにかく放課後まではキチッと授業を受ける。別れる前にこれは必須条件だと斉藤さんからも厳命されていた。
なので休み時間毎にカズと今日の捜査について語り合い気を紛らわせて、同時にそのたびに益々期待が胸に膨らんでいくのを感じていた。非日常に今自分たちは踏み込むんだ。そう思うだけで胸が躍った。

そうしてようやく待ちに待った放課後が訪れた。俺たちは意気揚々と教室を出ようとしたときだった。
「江波君、掃除・・。」
振り向くと奴がいた。八坂達也。八坂は先月うちの学校に転校し

てきた転校生だ。そしてこいつは俺の苦手な奴だった。顔はまあまあ。性格は一見して温厚、明るいし人当たりも良い。それが八坂の第一印象であった。しかし先月の終わり頃のことだ。八坂はあることをした。やらかしたのだそうだ。それ以来クラスでも一人でいる所をよく見かけるようになった。まあ当然なんだが俺は未だにそのことに納得がいかないでいたのだ。そのせいで八坂には半端な態度を取ってしまうのだった。そして今は俺に掃除当番が当たってることを言いに来た訳だ。ったく。

「おっと、掃除か。んじゃ俺は一足先に行ってるわな。」

そういってカズはこっちをニヤッと一瞥くれて教室を出て行った。むかつくなあいつ。

「分かった。」

そう言って仕方なく俺は掃除箱から箒を取り出したのであった。

〜未完です〜

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8409q/

光と影

2011年3月10日01時10分発行